

福沢諭吉作

イソツプ物語抄

朗読 堀田紀真

第5卷 3・福沢諭吉「イソップ物語抄」

福沢諭吉（ふくざわ ゆきち）



1835年（天保5）・1901年（明治34）。豊前中津藩士の次男として大阪中津藩蔵屋敷に生まれる。緒方洪庵の適塾で蘭学を学び、1860年（安政5）に江戸中津藩中屋敷に蘭学塾を開く。これが慶応義塾の始まりとなる。同年、咸臨丸で米国を訪れ、以後は蘭学塾を英学塾に切り替える。1862年（文久2）遣欧使節随員と

して欧州諸国を歴訪。帰国後、日本人の啓蒙を志し、「西洋事情」「学問ノススメ」「文明論の概略」等を発表する。子供を対象とした啓蒙書も多く、本編も1873年（明治5）に刊行された「童蒙教育」から抜粋したもので、正確には「イソップ物語抄」。英語版からの翻訳、紹介では最も早いものといわれている。

冒頭の「子供と蛙との事」では、「大勢の子供が池の中へ小石を投げ入れて遊んでいた。池の中のカエルは子供たちに「石を投げ入れることは、君たちにはなぐさめでも、私たちには命にかかわること、よくこの道理を知りなさい」と言った」と諭している。

「用語解説」

水気（すいき）

みずけ、しめりけ

温気（うんき）

暑気、また蒸し暑いこと

子供と蝦蟆との事 かえる

かえる すま 蝦蟆あまた住へる池の ほとり 辺に、大勢の子供来りて池の中へ小石を投げ、二つ玉の三つ

玉のとて、すひやく 数百の小石一時に水に落ち、蝦蟆の難 なんじゆう 渋 いっぴき ひとかたならず、今にも命危 あやう

しと共に心配したりしが、そが中に いっぴき 一疋の強き蝦蟆あり。危き場合を恐れもせず、水の

おもて 面に かしら 頭を出して声高らかにいひけるは、あら慈悲なき子供哉、かな 如何で悪事を学ぶ

すみやか の速なる、君のためには なぐさみ 慰なるも、我らがためには一命に關ることなり、よくも

物事の道理を勘弁し給ふべしと。

百姓その子に遺言の事

あ 或る百姓病に罹 やまい て全快のほど かかり 覺束なきに至り、おぼつか つらつら死後の事を案じて、

農業は我生涯勉めし仕事なれば子供らへもこの業を継がして出精させたきものと思ひぬれば、乃ち工夫を運らして兄弟の子供を呼び、遺言して云く、汝らへ遺物として与ふる物は我田地と葡萄の畑となり、これを汝兄弟にて寄合に保つべし、されどもこの田畑を決して他人の手に渡すべからず、その子細は田畑の外に余は別の宝物を所持する哉も計りがたし、もしこれあらは地面の下一尺より深からざる処へ埋め置きしはずなりと。

子供らはこの遺言を聞き、病人の宝物といひしは兼ね貯の金子を畑へ埋めしに相違なしと思ひ、親父の死後に至り、兄弟力を合せてその田地も葡萄の畑も隅々に至るまで鋤きかへしたりしが、一銭の金をも掘出さずして一時は大に気を落したれども、かく地面を鋤きかへしたるに由り、その年の作物は格別によく実り、秋の収納に至てこれを

見れば、真に宝物を掘出せしに異ならざりしと。

黄金の玉子を生む鷺鳥の事

或人の家に、毎日黄金の玉子を生む鷺鳥あり。主人はこの幸福を得て満足すべきはずなるに、かへつて貪欲の心を増し、毎日一つづつ玉子を取らんより、彼の鷺鳥の腹を割きその無尽蔵を開かんものと思ひ、これを殺したるに唯一の玉子をも見ず、大に望を失ひ後悔したりしとぞ。

蝦蟆の仲間かえるに君を立たつる事

蝦蟆の仲間かえるに共和政治の法を立てしが、いづれも満足することを知らず、早くも心変り

して自主自由の風を厭いとひ、何とかしてその政事まつりごとの様をかえ変かんものと思おもひ、乃すなわち
いかずち

雷いかずちの神なる木星を念ねんじ、我仲間わがなかに王たる者を下くだし給たまへと祈いのりけり。

木星も兼かて慈悲深あまき神なれば、なるたけ蝦蟆あまのためために災わざわい害わいの少すくなからんことを思おもひ、

一片の木の切れを天より送り、これを汝らの王に定さだむべしとの命いのちに由より、蝦蟆あまらは大おほに悦よろこび、

この木の切れを王の位みかどに奉たてりて頻しきりにこれを敬うやみ尊たびしが、漸ようやくこれに慣なれ、王

の心こころ意いの温ぬく和やわなるをよきことことにして、最早もはや敬うやふ心こころもなく、次第ついでになれなれしく近ちかづき、

遂ついににはこれを侮あなどり、「かかる者は我仲間わがなかの王みかどに為なし置おきがたし」とて、更さらにまた木星ごいさぎに

請こひ、別わかくに王みかどたる者を下くだし給たまへと願ねがひければ、木星ごいさぎもこの度は怒おこり給たまひ、さらばとて五位ごいさぎ鷲じゆを遣つかはしたり。

五位ごいさぎ鷲じゆはあまたの蝦蟆あまに君きみとし臨のぞみ、位みかどに即つきしその日ひより配下はいかの者ものを捕とへてこれを

喰くらひ、大に国中を悩ましければ、蝦蟆の難渋は以前に百倍し、こは思おもいの外のことなり
とて、また木星に訴へてこの度の王をも取替たまへと歎願したれども、木星は最早この歎
願の次第を聞入れずして云いわく、「汝らが訴うつたる所の難題は、もと汝らが無分別にて自か
ら招きし禍なれば、自から堪忍するより他に方便あるべからず」と。

蟻ありといなごの事

秋過ぎ冬もはや来り、蟻ありの仲間は忙しく、雨露うるにさらせる穀物を、住居かたえの傍かたえに取入れ
て、小山の如く積つみたたくわ貯たくわへ、寒さの用意專一と、共に働くその折から、夏の終に生残りし
一疋のいなご、飢寒に堪へ兼ね半死半生の様にて蟻ありの家に来り、見苦しくも腰を屈めて、
「君が家に貯へたる小麦にても大麦にても、唯一粒を恵めぐみてこの難渋を救ひ給へ」と

お願いが
請願ひしに、一疋の蟻これを詰り問ひけるは、「我らは夏の間に辛抱して兵糧を貯へ

しに、君においては更にその用意もあらず。長き夏中のその間は何事に日を送られしや」

との尋に、いなごも赤面し、「さればその事なり。夏の間は唯面白く月日を送り、朝

には露を飲み夕には月に歌ひ、花に戯れ草に舞ひ、冬の来らんとはゆめゆめ考へざりし

なり」と答れば、蟻の云く「君の言葉を聞ては我らには別にいふべきこともなし。誰

にもあれ、夏の間には歌舞飲食する者は冬に至りて餓死ぬべきはずなり」と。

風と日輪と旅人との事
にちりん

ある
或時、北風と日輪とおのおのその力を誇り、いづれが強しとて争論止まざりければ、

されば彼の旅人に向て銘々の力を試み、よくその羽織を脱がしめ得ば、これを以て力の強

き者と定めんとて、双方この議に同意したり。

北風は頻しきりに吹起り、寒き風に雨を交へ、その勢衝つくが如くなれども、旅人はなかなか

か以て羽織を脱ぐべきやうすもなく、ますますこれを固く結びて身体からだに纏まとへり。然しかる所

に濃き雨雲の間より日輪静に見はれ出、天一面に寒き水氣を追払ひ、焼くが如き光を

以て、彼の風雨に難渋したる旅人の頭を照らしければ、旅人は温氣うんきに堪たへ兼かね、先まづその

重き羽織を脱ぎ、森の樹蔭こかげに行て休息したりしとぞ。

羊飼ふ子供 おおかみ 狼 と呼びし事

羊の番する子供ありて、或日なぐさみに同村の者を驚かさんと思ひ、「おほかみおほかみ」と呼よばはりて走りければ、村の人々は おおかみ 狼 の来りて羊に掛りしことならんと心得て、忙

はしくかけ出し、その場に至り見れは何事もなきゆゑ、つまらぬことなりとてこの子を叱りて銘々の家に帰りたり。その後数日を過ぎ、現に狼いで来りて群むらりたる羊へ飛掛りければ、子供はあわて、村に帰りて「おほかみおほかみ」と声を限りに呼び叫べども、村の者は落付はらひ、最早二度はだまされぬぞとて見向く者もあらず。これがため夥多あまたの羊はみすみす狼に取られければ、羊の主人はこのよしを聞きて大おおに怒り、直すぐにこの子供へ暇いとまを遺つかしたり。

右の次第にて、戯たわむれとはいひながら、一度の虚言うそを以て、この子は渡世とせいの道を失ひたり。